

東の飛鳥（本市と壬生町・上三川町）



下野市教育委員会 文化財課

これまで2回にわたって飛鳥時代と飛鳥地方について記しました。どうしても古代史は、文字資料が多く残り発掘調査が進んでいる近畿地方を中心として語られることが多く、東国の記述は少ないようです。しかし、東国・下毛野（下野国）にも近畿地方と同様に人々の営み（歴史）がありました。現代の私達が想像している以上に古墳・奈良時代（1400～500年以上前）頃には、当地域と中央、様々な地域は既に強い結びつきがあり、多くの人・モノ・情報が行来していたと考えられています。

5世紀以降、豪族（地域の首長で国主と呼ばれたか）に支配されていた地域は、6世紀になるとヤマト政権の政治制度が地域へ波及し、新たな「国造制度」として豪族の中から中央の信認を得た国造が新たな地方官として選ばれました。この国造は朝廷における役割や国造が統括する地域のランキングなどによって、氏姓制度により臣・君・公・連・直などの姓が与えられました。地方では「地域力」の格差によりその地域を統括する豪族の格付けがされたようなものです。また、「部民制」や「屯倉制」もこのころ導入されます。部民制は百済の制度にならって導入された制度で、大きくは（1）王族や皇子に関する名代・子代（2）王権に奉仕する職能集団（3）豪族が所

有する部曲の3種類に分かれます。『日本書紀』によれば敏達天皇6年（577年）に、この名代・子代の中に「壬生部」が新たに設けられたと記されています。壬生部は「乳部」とも記され、中央王権と直接結びついた部民と考えられおり、皇子に母乳を与える人達、皇子を守り育てる人達、また、その人達の収益のための土地と人を指します。全国的にみても東国には壬生部が多く設定されました。お隣の壬生町の起源にも関連があるのでしょうか。また、余談ですが、壬生町犬飼の地名は、直接の由来かどうかわかりませんが、部民制の犬養部との関係が想定されています。文字が示すように番犬のブリーダーであるとともに宮中の警護をする軍事に秀でた集団であったようです。平城宮の東門、平安京の大内裏の外郭十二門のうちの一つが若犬養門と呼ばれ、犬養部が管理していました。ちなみに藤原不比等と再婚して光明皇后の母となった県犬養三千代もこの犬養部に関連する氏族です。「屯倉制」の屯倉とは、もともと「敬語のミ」＋（建物・倉庫を指すヤケ）による言葉で、王権が所有する施設を指す言葉で、王権が直轄する拠点・土地を指します。屯倉には「田部」と呼ばれる田地を耕作する部民が土地とセツトで配置されました。大正時代に『大日本地

名辞書』を編さんした吉田東吾の説では、上三川町の「多功」はこの田部・田郷（「タゴリー」と呼ばれていました。）が訛ってできた地名と考えられています。

この屯倉からの収益は国税として収納されるのではなく、その土地とその住民（労働力）も王権直轄の特別枠とされたわけです。もしかすると6世紀後半から7世紀に壬生町周辺に勢力を持ち東国でも最大級の円墳である壬生車塚古墳を築造した豪族は、中央と直接結びついた氏族であったのかもしれない。上三川町多功も王権との関連はわかりませんが、この地にも7世紀初頭の東国を代表する50m級の方墳である多功大塚山古墳が築造されています。この古墳に隣接して築かれた多功南原1号墳（30m級方墳）の築造が終わった直後といっても過言でない時期と考えられる7世紀第3四半期頃に最初の下野薬師寺が建立されます。言わずと知れた「下毛野氏」の一族のための寺と想定されており、下毛野朝臣を名乗っていることから下毛野国造の末裔と考えられます。下野市域だけでなく、現在の壬生町周辺、上三川町周辺、さらに当時は那須国であった那珂川町・旧馬頭町周辺などは古墳・飛鳥時代頃の東国を代表する史跡・遺跡の宝庫であり、今後も大切に守り続けるべき地域でもあります。